高校生の学校適応に関する縦断的研究
――重要な他者との関係と学校雰囲気の影響――

竹綱　誠一郎
鎌原　雅彦
小方　涼子
高木　尋子
高梨　実

論文要旨

本研究の目的は、高校生にとって重要な他者である親、友人および教師との関係、入学した学校満足度と学級凝集性が、その後の中途退学や学校適応にどのように影響するのかを明らかにすることである。高校1年生202名に対し、1年生時1学期、1年生時3学期および2年生時3学期に3回、これらの変数を繰り返し測定した。データに不備のなかった198名を中退と学校適応の違いに応じて5群に分割し、それぞれの変数を従属変数として分散分析を行った。その結果、2年生で中退する生徒が親との関係が低いという特徴が見られた。また、学校適応に関しては、学校満足度が影響することが明らかになった。中退する生徒や学校適応に問題が生じる生徒を早期に発見する手がかりを得ることができた。一方、今回の研究協力者独自の結果と考えられる面もあり、今後、多様な高校での調査が必要であると言える。

キーワード【中退、学校適応、親との関係、学校満足度、縦断的研究】

問題と目的

高校を中途退学する生徒（以下、中退者）数は、平成8年度に初めて10万人を超えた。この傾向は平成13年まで続き、平成14年度から中退者数が減少し始め、近年は7万人台（中退率は2.1%前後）で推移している。しかしながら、中退者数が減少している一方で、不登校となっている生徒は増加している。平成19年度データでは、全国の高校中退者数は約7万3千人、不登校者数は約5万3千人となっている（朝日新聞2009年7月26日付朝刊）。30人中1人以上の高校生が高校を中退したり不登校となる現状は、我が国の中等教育におけるきわめて深刻な問題と言える。

高校中退の原因を明らかにするために、これまでに報告されてきた研究や調査のほとんどは、中退者に面接や質問紙に応えてもらうという方法によって実施されてきた（例えば、Seidel & Vaughn 1991）。しかし、中退者に中退の理由を問う方法には、高校を中退したという結果を正当化する方向で反応がずれる危険性がある。このようなバイアスのないデータを

得る１つの方法として、生徒が在学中から調査を始め、その後を彼らを３年間フォローするという縦断的方法がある。中退した生徒が現れた時には、その生徒の在学中の調査データを中退者と完遂者間で比較することによって、原因に言及することができる。

この方法には、生徒の自己正当化という危険性を排除できるだけでなく、時間的な流れから調査で測定した諸変数が後の行動を予測したという方向で因果関係を明確に示すことができる。しかしながら、このような方法でデータを収集することは決して容易なことではないので、このような手続きを実施した研究はわずかしか見あたらない（Cairns et al. 1989, Janosz et al. 2000、Taketsuna et al.（2000））。

学校適応を規定する要因は何だろうか。重要な他者として親、教師および友人が生徒の学校適応に重要な役割を果たすことを明らかにした研究（Taketsuna et al. 2000、Wentzel 1999、Woolley et al. 2009）、友人や学級との距離感が重要な要因であると指摘した研究（Seidel & Vaughn 1991、Taketsuna et al. 2000）などがある。Taketsuna et al.（2000）は、高校に入学した直後に、生徒全員に重要な他者との関係、学校満足度や学級凝集性を尋ね、それらの要因が在学中の学校適応を予測するかどうかを吟味した。後に中退した生徒や欠席の多い生徒が、親と学校の話をするといった親密な親子関係を十分に持っていないことなどが明らかにされた。この研究は、入学直後の測定値だけで後に中退するか否かを予測しようとした。しかし、親、教師や友人との関係や学校に対する満足感は３年間の在学中に変化していくものかもしれない。

これらの要因を定期的に繰り返し測定することによって、諸要因と学校適応との関係をよりダイナミックに検討することができると考えられる。竹綱ら（2003）は重要な他者との関係、学校満足度および学級凝集性を１年生時の１学期と３学期の２回測定し、３年後に卒業した群とそれ以前に中退した群の間でそれぞれの変数がどのように変化していたかを検討した。その結果、中退群は卒業群よりも学校への満足度と学級凝集性が３学期にかけて大きく低下していることがわかった。しかし、重要な他者との関係については、卒業群が中退群よりも親との関係だけが一貫して良いことがわかった。この研究はくり返し調査することで変化プロセスを見るという点で優れていたけれども、３つの問題があると考えられる。第１は、１年生３学期で測定が終わっていることである。さらに、将来の進路を考え始める高校２年生後半にも測定することが望ましいと考えられる。第２は、生徒を中退群と卒業群に２分割して比較していたことである。１年生時に中退した生徒と２年生時に中退した生徒を同等に考えることは妥当でなかったかもしれない。第３は、卒業した生徒全員を卒業群としてひとまとめにしていたことである。卒業した生徒の学校への出校状況には学業成績に相当なばらつきがあった。卒業した生徒を１つの群とするよりも、学校適応度に違いのある複数の卒業群に分割することの方が有用な結果が得られ、不登校の原因についての示唆も提供できると考えられる。

本研究では、重要な他者として親との関係、教師関係および友人関係に着目し、学校雰囲気の認知として学校満足度と学級凝集性を取り上げた。そして、これらの変数を1年生1学期、1年生3学期、2年生3学期の3度くり返し測定し、生徒は1年生時の中退者群、2年生時の中退者群、適応度が低い卒業群、適応度が中程度の卒業群および適応度が高い卒業群に分割した。本研究の目的は、重要な他者との関係と認知された学校雰囲気が生徒の学校適応に及ぼす効果を検討することである。

方法

(調査対象者)

公立全日制専門学科高校に入学した1年生202名の内、質問紙への回答に不備のあった4名を除いた198名（付記参照)。

(質問紙)

1年生1学期、3学期さらに2年生3学期の3回、同一の質問紙をくりかえし課した。

質問紙は、調査実施日以降もしばらくの期間、学校に留め置いた。このことによって、調査実施日に欠席した生徒も出席した日に実施することができ、データの欠損を最小にすることができた。

重要な他者関係に関する尺度は、以下の3尺度からなる。

・親との関係…学校の勉強のことを親と話す等の8項目

・教師関係……先生と話をするのが楽しい等の11項目

・友人関係……学校で友人と会うのが楽しみである等の6項目

学校雰囲気に関する尺度は、以下の2尺度からなる。

・学校満足度…「校風が気に入っている」等の8項目

・学級凝集性…「自分のクラスは楽しい雰囲気である」等の8項目

各項目には「あてはまる」から「あてはまらない」までの5段階で評定し、それぞれ5点、4点、3点、2点、1点を与えた（逆転項目は、逆の得点化をした)。各尺度の項目得点の合計点を項目数で除し、それを各尺度の得点とした。

結果

(調査対象者の群分け)

中退者44名を2群に分割し、1年生での中退者を1年中退群、2年生での中退者を2年中退群とした。卒業した生徒154名は、3年生時の最終評定平均値を用いて、各群の人数が等しくなるように3分割した。学校適応の基準として評定平均値を用いた理由は、この評定値

には学業成績だけではなく出席状況も加味されて算出されているので、学校適応の差を反映している指標であると判断したからである。それぞれ、学校適応低群、学校適応中群、学校適応高群とした。

(1) 1年時中退群…1年生時に中退した29名。従って、1年生3学期のデータがない。

(2) 2年時中退群…2年生時に中退した15名。従って、2年生3学期のデータがない。

(3) 卒業・学校適応低群……53名。評定値3.0点（欠席日数11.8日、遅刻日数54.3日）。

(4) 卒業・学校適応中群……50名。評定値3.4点（欠席日数4.4日、遅刻日数19.3日）。

(5) 卒業・学校適応高群……51名。評定値4.1点（欠席日数1.1日、遅刻日数3.9日）。

（分散分析）

1年生1学期、1年生3学期および2年生3学期の各尺度得点を従属変数とし、群要因を独立変数とした一元配置の分散分析をくり返し行った。その結果は、表1にまとめたとおりである（教師関係については3つの時期すべてにおいて有意差が見られなかったので、表に平均値を記載しなかった）。

1年生1学期の時点で5群間に有意差のあった尺度は、親との関係と学校への満足度の2つであった。親との関係尺度に関して多重比較を行った結果、学校適応高群＞2年中退にのみ有意差があり、他の群間には有意差は見られなかった。学校満足度に関しては、学校適応高群＞1年中退群と学校適応高群＞2年中退群に有意差があり、他の群間には有意差が見ら

表1　群別の各尺度の平均値

	1年中退	2年中退	学校適応 低	学校適応 中	学校適応 高	
(1年生1学期)						
親との関係	4.19ab	3.63a	4.43ab	4.44ab	4.65b	F＝2.86*
友人関係	3.19	3.20	3.38	3.30	3.20	n.s.
学校満足度	2.38a	2.25a	2.53ab	2.70ab	2.95b	F＝3.32*
学級凝集性	3.20	3.11	3.46	3.37	3.28	n.s.
(1年生3学期)						
親との関係		3.36a	4.29b	4.68b	4.52b	F=5.16**
友人関係		2.79a	3.25ab	3.50b	3.42ab	F=2.96*
学校満足度		1.70a	2.31b	2.54bc	2.94c	F=10.6**
学級凝集性		2.64a	3.16ab	3.42b	3.41b	F=2.95*
(2年生3学期)						
親との関係			3.11	3.42	3.37	n.s.
友人関係			3.45	3.53	3.29	n.s.
学校満足度			2.39a	2.51a	3.05b	F＝7.28**
学級凝集性			3.26	3.40	3.50	n.s.

**p<.01 *p<.05

平均値の右の添字は、同じ文字が書かれた群間には5％水準で有意差がないことを示す

れなかった。

１年生３学期の時点では、すべての尺度において４群間に有意差が見られた。親との関係に関して多重比較を行った結果、親との関係については２年中退群は他の３群よりも有意に低く、他の３群の間には有意差は見られなかった。友人関係については、卒業中群＞２年中退群にのみ有意差が見られ、他の群簡には有意差は見られなかった。学校満足度に関しては、２年中退群は他の３群よりも有意に低かった。また、学校適応高群＞学校適応低群で有意差があり、学校適応中群は他の２つの適応群と有意差がなかった。学級凝集性については、学校適応高群＞２年中退群と学校適応中群＞２年中退群に有意差がみられ、学校適応低群はどの群とも有意差がなかった。

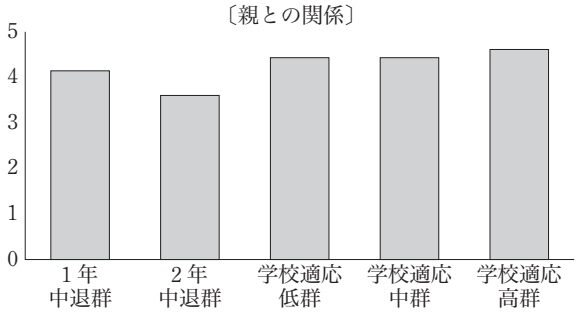
２年生３学期の時点で３群間に有意差のあった尺度は、学校満足度のみだった。学校満足度に関して、学校適応高群は学校適応中群と学校適応低群の２群よりも有意に高く、学校適応中群と学校適応低群間には有意差は見られなかった。

考察

（１年中退群と２年中退群の比較）

１年生１学期時点では、４尺度すべてにおいては両群に有意差は見られなかった。しかし、親との関係においては２年中退群だけが学校適応高群と有意差が見られ、１年中退群にはどの適応群とも有意差が見られなかった（図１参照）。本研究の調査対象者の学校満足度は３回の調査すべてで３点未満であった。親との関係得点が4.19と比較的高いことから、親と相談することによって早期の進路変更に踏み切ったのかもしれない。一方、親との関係得点が他の４群よりも低かった２年中退群は、１年３学期に向けて４尺度すべてで低下し、２年生のうちに中退した。１年生３学期にかけて学校満足度が極端に低下していることから、この視点から生徒を見ることによって、１年生３学期時点で２年生で退学する生徒を早期に発見することができるかもしれない。

図１　１年生１学期の親との関係得点



１年生中退群と２年生中退群は、中退のタイミングだけでなく、質的にも異なる群であると考えられる。例えば、２年生中退群の生徒が高校へ再入学する可能性は、１年中退群の生徒よりは小さくなっているからである。今後の研究では、それぞれの中退群の生徒がその後

どのような進路をとったかをとらえるために、更なるフォローアップが必要だろう。

(中退群と学校適応群との比較)

中退群は、1学期時点では、親子関係と学校満足が低めではあるものの、他の尺度では学校適応群とあまり変わっていない。しかし、3学期にかけては、学校適応群がそう変動していないのに対し、中退群は4尺度すべてが低下していた。以上のことから、親との関係、友人関係、学校満足度および学級凝集性は中退を予測する重要な要因であることが明らかになった。

(学校適応高群、学校適応中群および学校適応低群の比較)

1年生1学期時点では、4尺度すべてにおいて3群間に有意差は見られなかった。ところが、学校満足度に関しては、1年生1学期から3学期にかけて、学校適応低群だけが低下し、3学期時点では学校適応高群よりも有意に低くなっていた(図2)。さらに、2年生3学期にかけては、学校適応高群だけ満足度が増加し、他の2群より有意に高くなっていた(図3)。一方、他の尺度については、これほど明確な違いは見られなかった。このことから、3年生時の学校適応に影響する要因が1年生後半以降の学校満足度であることがわかった。

図2　1年生3学期の学校満点度得点

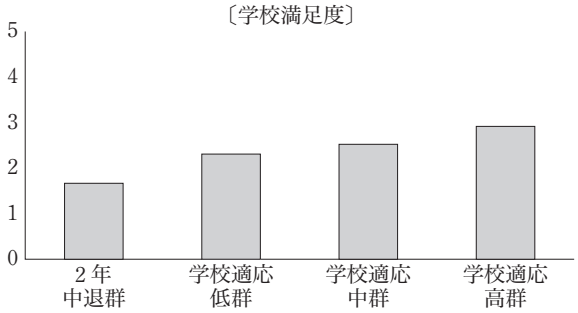
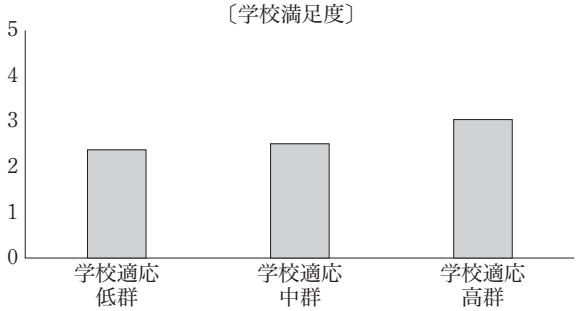


図3　2年生3学期の学校満点度得点



(まとめと今後の課題)

1年生中退群の生徒は学校適応群の生徒と比べてそう大きな違いは見られなかった。一方、2年生中退群の生徒は1年生3学期時点で、重要な他者関係と学校雰囲気の双方においてきわめて低い得点を示していた。以上のことより、1年生のうちに退学する生徒を見分けることが困難であるのに対し、2年生で中退する生徒を1年生時に早期発見できる可能性が示唆された。また、学校適応の程度に影響する要因としては、学校満足度が特に重要な要因であることが明らかになった。

親との関係は中退をある程度予測するという点で有効な要因であったけれども、学校における重要な他者である友人関係と教師関係は、中退にも学校適応にもほとんど寄与しなかっ

た。特に、教師関係はどの時点でも2点台と低く、分散分析結果全てにおいて有意差がみられなかった。この結果は、教師との関係が学校適応に極めて重要な要因であることを明らかにしたWoolley et al.（2009）の結果と対照的なものであった。Woolley et al.（2009）は、ラテン系アメリカ人の文化では年上を敬うので、この文化が教師との関係が学校適応に大きく貢献したことの背景であると述べている。日本にも年上を敬う文化がある。それにもかかわらず、教師関係が生徒の学校適応にまったく寄与しないという本研究の知見は、日本における教師・生徒関係の現状として一般化できるものなのだろうか。それとも、本研究の調査協力校の事例の特徴なのだろうか。本研究の協力校が専門学科高校であること、全国平均の中退率2.1%の10倍を超える中退者が現われたこと等を考えると、普遍的な知見を得るためには、今後、多様な多くの高校において同様の調査を実施する必要があるだろう。

引用文献

朝日新聞　2009　7月26日付朝刊23面「きょういく特捜部」

Caiers,R.B., Cairns,B.D., & Neckerman, H.J. 1989 Early school dropout: Configuration and determinants. *Child Development*, 60, 1437–1452.

Janosz, M., LeBlanc,M., Boulerice,B., & Tremblay, R.E. 2000 Predicting different types of school dropout: A typological approach with two longitudinal samples. *Journal of Educational Psychology*, 92, 171–-190.

Seidel,J.F., & Vaughn, S. 1991 Social alienation and the learning disabled school dropout. *Learning Disability Research & Practice*, 6, 152–157.

Taketsuna, S., Kambara,M., Ogata,R., Takagi, H., & Takanashi,M. 2000 *A longitudinal study on dropout in a senior high school in Japan*. Paper presented at the meeting of 27th International Congress of Psychology (Stockholm, Sweden))

竹綱誠一郎・鎌原雅彦・小方涼子・高木尋子・高梨実　2003　高校中退予測要因の継時的研究　人文、2、103–109.

Wentzel, K.R. 1998 Social relationships and motivation in middle school: The role of parents, teacher, and peers. *Journal of Educational Psychology*, 90, 202–209.

Woolley, M.E.. Kol, K., & Bowen, G.L. 2009 The social context of school success for latino middle school students: Direct and indirect influences of teachers, famili, and friends. *Journal of Early Adolescence*, 29, 43–70.

付記

本論文の調査対象者は、竹綱ら（2003）論文の調査対象者と同一である。本論文では、主に、2003年論文では未発表のデータを分析し明らかになったことについて論じている。また、本論文において竹綱ら（2003）論文で用いたデータに言及する部分があるが、それは本研究に沿う方向で、異なる手法で再分析したものである。

また、以上の分析の過程において、竹綱ら（2003）論文ではデータ不備として除かれていた4名分のデータがマッチングでき、復元された。このことにより、最終的な調査対象者数が4名が増加し、198名となった。

なお、本研究の分析結果は、2006年7月にウィーン（オーストリア）で開催された第26回国際

応用心理学会において発表した。

ENGLISH SUMMARY

A longitudinal study on students' adjustment to senior high school: The influences of relationships with important others and the climate of a school

Seiichiro TAKETSUNA, Masahiko KAMBARA, Ryoko OGATA, Hiroko TAKAGI & Minoru TAKANASHI

The purpose of this study was to confirm some factors that predicted dropouts and students having poor adjustment to schools. We selected one senior high school having many dropouts every year, and conducted a longitudinal research study for three years. The data of 198 students on interpersonal relations and attitudes toward school and classes were collected three times, during the first, and third terms in the first year, and during the third term in the second year. The students were divided into five groups: dropouts in the first year, dropouts in the second year, low adjustment students, medium adjustment students and high adjustment students. ANOVA showed that a deficit in relation to parent in the dropout groups was salient, and that satisfaction at school among high adjustment students was higher than in other groups.

Key Words: dropout, adjustment to school, parent, satisfaction at school, longitudinal study